アンコール＝ワットについて

岩本　裕

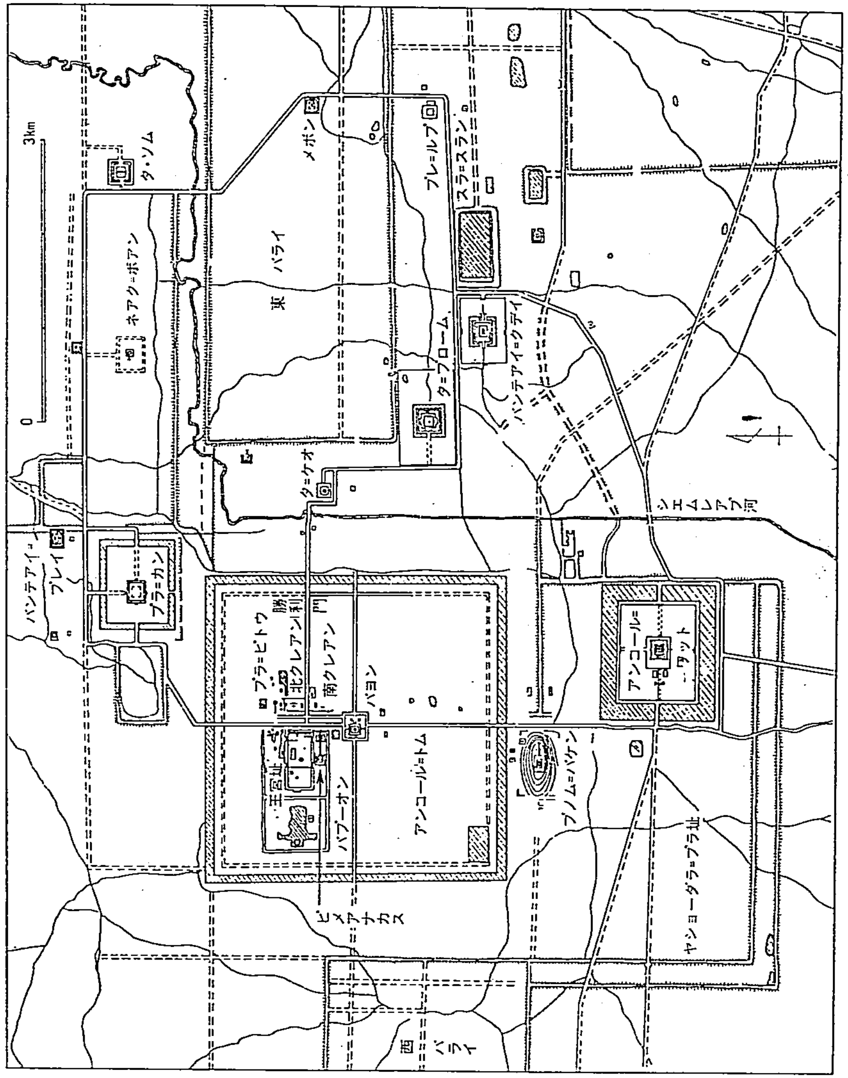
一

昭和五十七年十一月、カンボジア(現在カンプチアKampuchea という）の現在のヘンサムリン政権が十二年ぶりに西側に門戸を開き、観光団を受け入れるとのことで、日本電波ニュース社の協力で西武百貨店旅行事業部が主催して「アンコール遺跡と文明探求の旅」の旅行団が編成された。筆者は現在『ラーマーヤナ』の和訳をすすめている者として、予てからアンコール＝ワットにある「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫を見たいと念願していた。と言うのは、アンコール＝ワットの研究書あるいは旅行記・案内書の類には、建設者「スールヤヴァルマン二世の像」の浮彫とか、「乳海攪拌の神話」の浮彫などの写真はよく見られたけれども、「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫、とくに「ハヌマンの肩に乗って戦うラーマの像」とか「十頭二十手の魔王ラーヴァナの戦う姿」などの浮彫の写真はほとんど見られず、たとい見られても不鮮明なものであったからである。また、インド文化がアジアの諸国とくに東南アジアの諸民族の間にいかなる影響を及ぼしたかを研究テーマとしている者にとっては、アンコール＝ワットにはいくつかの疑問があり、その解明の手がかりを得るためにも、一度親しく視察しておき

たかったのである。そこで、旅行団の募集があると知って、早速に参加を申し入れたのであった。

十一月十七日朝、成田空港に集合した。講師はわが国で唯一人のカンボジア史の専門家である上智大学教授石沢良昭博士で、当日集合した人は添乗員を含めて二十六名（うち女性七名）であった。筆者は一番の年長ということで団長に指名されたが、万事石沢博士に頼ってばかりいたというのが実状である。

十一月十七日の夜はバンコクの Rama Tower Hotel に一泊。翌十八日朝、エア＝フランスでバンコクからヴエトナムのホウチミン市（以前のサイゴン）に飛んだ。バンコクからはＮＨＫをはじめフジ・アサヒ・ＴＢＳテレビなどの特派員が同行し、総勢三十一名の大旅行団となった。ホウチミン市の Hotel Cuu Long（もとの Majestic Hotel）に一泊。翌十九日午前九時にホテルを出発し、チャーターしたカンボジア航空の双発機（アントノフ四二四）で離陸したのは十一時二十分、正午ごろにカンプチアの首都プノンペンに到着した。当方は観光旅行団であるが、先方は友好親善使節団の待遇で、外務省の宣伝課長サム＝ペン Sam Pheng 氏（四十三歳、もと教員）の出迎えを受け、団長として歓迎の花束を受けた。生まれて初めての経験であったが、団長の仕事とはこういうことであると覚悟した次第である。石沢氏と一緒に外務省差しまわしの車に乗せてもらい、宿舎の迎賓館 Hotel Chamcarmon に向かう。午後二時から外務省の新聞局長チュム＝ブンロン Chum Bun Rong 氏（三十二歳、プノンペン大学英文科出身）も出席して昼食。団長として挨拶する。石沢氏がフランス語に通訳。三時から車を連ねて、まずポルポト政権時代の収容所跡に案内される。残虐な内戦の結果に戦慄する。そのあと、国立美術館を見学、五時に出て隣接する美術品店で『ラーマーヤナ』関係の浮彫の拓本を購入する。いずれの寺院の浮彫の拓本であるか不明。あと、プノンペンの丘にまわり、六時半ごろ宿舎に帰る。七時から夕食。新聞局長も出席。このときも、乾杯の音頭をとる。なお、この席には日本電波ニュース社のプノンペン駐在員の熊谷均氏と純子夫人が同席する。新婚六ヵ月の若夫婦で、二人で色々と新鮮な見聞（プノンペンの生活、官吏の待遇・特典など）を話してくれる。



アンコール周辺図

十一月二十日(土)、いよいよアンコール＝ワットを訪れる日である。午前七時にホテルを出て、昨日と同じ飛行機をチャーターして、八時二十分離陸、九時過シエムレアプ飛行場着。直ちにGrand Hotelに直行、部屋割りのあと十時に出発、バヨンに直行する。途中、アンコール＝ワットの外濠を南から西側（アンコール＝ワットの正面）にまわり、アンコール＝ワットの全貌を遠望する。十二時までバヨン視察、破損の激しいのに驚く。いろいろと細部にわたって検討している間に一行からはぐれ、西北隅のところで道を迷い、暗闇の中をうろつく。ホテルに帰って昼食をし、午後二時半に出発して、午前に通った道を進み約六キロ、アンコール＝ワットの西門前に到着する。一刻も早く「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫の前に立ちたかったが、はやる心をおさえて一行のあとにつづく。第一回廊の入口で、一行は石沢博士の案内で右折してゆくのと離れ、左折して問題の浮彫の前に立つ。チラッと見た時計は午後三時二十分だった。遂に来たと、いうにいわれぬ感懐に一瞬つつまれたが、それに浸っている暇はない。幸に、同行していた日本電波ニュース社のプロデューサー橋田信介氏が助けてくださり、一眼レフで細部を撮っていただく。自分はオートフォーカスのカメラで少し離れた位置から撮影した。さきに記したラーマとラーヴァナの姿は自分の撮影では不鮮明に終ったが、幸に橋田氏の好意に甘えたフィルムに鮮明な影像があり、永年の渇をいやすことができた。そのあと、一行より約三十分おくれて第一回廊を一周し、かねてから疑問をもっていた点のみに注目して歩いた。そのために、中央の高塔を視察する時間がなかった。五時近くアンコール＝ワットを背景にして蓮池の前で一行の記念撮影をし、五時半ごろ帰路についた。ホテルで夕食、シエムレアプ州委員会の委員の一人が出席。その席上翌日視察の予定であったバンテアイ＝クデイ、バプーオン、ピメアナカスへ行くことにカンプチア側から難色があり、結局予定の変更を余儀なくされる。

十一月二十一日、午前中はアンコール保存委員会事務所見学、アンコール文化の遺物である仏像とか碑文などを見る。午後は西バライを視察、現在は灌漑用水の供給池となっている人造湖の規模の大きさに驚嘆する。その

あと、飛行場に向かい、プノンペンに帰る。ロシア人の飛行士が気を利かしてくれて、機はアンコール＝ワットの上を二回旋回し、また雨期あけの溢水したトンレ＝サップ湖の上を横断して飛ぶ。溢水した湖の大きく広いのを改めて知った。プノンペン到着後、直ちに旧王宮に直行する。王宮とならんで、旧王家の菩提寺院「銀の寺」（フランス語で Pagode d'argent という）があり、その周囲の壁に『ラーマーヤナ』の壁画があった。バンコクのワット＝プラケオを真似た形式であるが、どの絵もその下半分の剝離が甚しく場面の同定は不可能だった。当日はたまたま日曜日だったので、王宮前の広場には黒山の人出で、象に乗ったりして興じていた。子どもの多いのに驚く。美人はいないかと探しまわり、漸く中国人系の丸ポチャの女性を見つけたに過ぎなかった。

十一月二十二日、一行は午前中はメコン河における独自な漁法の見学、午後はマス＝グレイヴやマーケットの見物に出かけたが、自分は疲労を理由にホテルに引籠り、前日視察したアンコール＝ワットに関するメモの整理をする。あとから聞くと、ジャーナリズム関係の人々は新聞局長の案内で市内を視察したとのこと、切歯扼腕したが後の祭りである。夕食後、国立劇場のこけら落しに案内される。石沢氏・新聞局長・劇場の支配人とならんで、最前列の中央に椅子を与えられる。上演された踊りは六種、まず第一は影絵（バン＝トム ban thom 原意は「大きな皮革」）によって、『ラーマーヤナ』のランカー島の戦闘の場面が上演される。演者がスクリーンの前後を走りまわるという相当に激しい演出である。第二はアプサラ（天女）の踊り、そして第三の演目はラーマとラクシュマナの二人が森で小鹿を追う場面で、いずれも可憐な踊りで、心のなごむ舞台であった。第四の演目は、一転して、ラーマ伝説を援用して現代の政治状勢を諷刺した演出である。正面に、一九七五年四月から一九七九年一月まで五年近くプノンペンの無人化・鎖国・虐殺という不可解な事態をひきおこした民主カンボジアの指導者ポルポトのみすぼらしい姿が、薄明りの脚光の中に浮び上っており、舞台前面には猿の姿をした数名の者が建設工事をしている。これはハヌマンの指揮の下に架橋工事をする『ラーマーヤナ』の一場面を髣髴させるものであ

った。すると、突如として、ポルポトの前にうずくまって恰好の黒いものから、シアヌーク、毛沢東そのほか全部で十人の似顔絵が飛び出す。その似顔絵のひとつひとつを同定する時間的余裕はなかったが、正にダシャ＝グリーヴァ Daśagriva（十頭ある者）の異名を持つ魔王ラーヴァナに現実世界の政治問題を反映させた演出である。この十頭の出現に猿どもは一旦は逃げるが、やがて一つずつ退治されてゆくという政治的意図のある演目であった。筆者は現実の政治問題を云云する立場にもないし、またそれは不可能であるが、その演出の仕方に興味をもったことは事実である。第五の演目は、若く美しい女にたぶらかされて村を逃げ出そうとする若者を農民の青年男女が寄ってたかって打ちすえるという簡単なプロットであったが、若者が肩にかつぐ袋に大きくアメリカ＝ドルの記号が書かれており、観衆の笑いをさそっていた。第六は、ベトナムとラオスとカンプチアの子どもたちがそれぞれの民族衣裳で仲よく踊るという演出で、現在あらゆる点でベトナムの支援の下に民生の回復と繁栄をはかっている現ヘンサムリン政権の政策を反映したものといえよう。それにしても、その六種の演目の中で三種が『ラーマーヤナ』またはそれに関聯のあるものであったことは、『ラーマーヤナ』を訳している筆者には非常に印象深いものであった。

舞台が終ると、新聞局長の先導で石沢氏と一緒に舞台の上に導かれる。花束を贈られたが、その花束を舞台の中央にいた可憐な主演女優に贈ったあと、歌が終るまで舞台上で観客席に向かったまま拍手をつづける。九時過終了。

翌二十三日はカンボジアから出発する日である。朝八時半に外務省に赴き、外務大臣フン＝セン Hun Sen 氏（現首相）と会う。年齢は三十一歳とか、どちらかと言えば闘士らしい風貌であった。現政権発行の種々のパンフレットを渡され、一行を前にして永々と外交問題を喋りつづけ、特に中国とタイに対する口調に厳しいものがあった。九時四十五分ごろ終り、直ちに空港に向かい、十一時過出発。十二時過にホウチミン市に到着。その地に二泊して、週一回周航のエア＝フランスで再びバンコクに出て、十一月二十六日午後六時ごろに成田着。旅行団

を解散する。

永年の念願であったアンコール＝ワット詣ではこうして終ったが、筆者の受けた数々の印象はいずれも強烈であった。それだけに、問題の整理に時間を要したことは事実である。また、いくつかの謎を自分なりに解決しえたと思うし、さらに疑問の深まった点もいくつか生じた。従って、今の気持としては再度アンコール＝ワットを訪れたいと願ってはいるものの、その願いがかなえられるか甚だ疑問である。われわれの一行に夫人と一緒に参加された写真家の横山宗一郎氏が、昭和五十八年二月上旬に新宿のペンタックス＝フォーラムで「浄土残景」と題して、旅行の際に撮影された写真を公表された。素晴らしいの一語に尽きる作品の数々であった。二月九日にそれを拝見したときに横山氏が

「カンボジアに関する書物はどれを見ても、内容はみな同じですね」

と言われた。筆者は

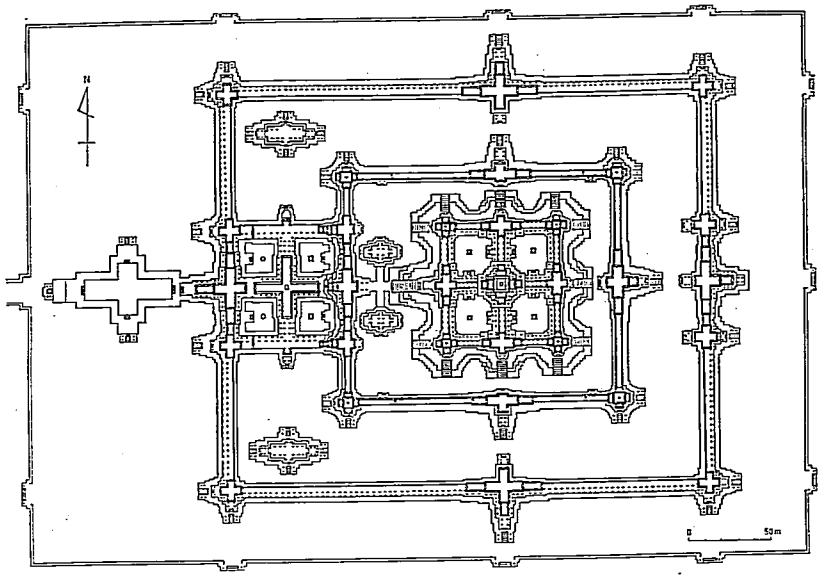
「カンボジアに関する研究は、今日までフランス学界の独壇場であり、わが国における唯一人の専門家の石沢博士はその学統を継承していられるのですから、今のところ仕方のないことでしょう」

と答えるほかはなかった。しかし、この横山氏の御意見は正に筆者が永年疑問として温めていた諸問題を総括的に指摘したものであった。筆者は敢えて従来の学説に異論を唱えるつもりはないが、現在主として東南アジアにおけるインド文化の影響に広く関心を持っている、インド学を専攻する一人の学究として、問題点を指摘し、それに対し筆者なりの解釈を提示することは許されるであろう。そして、それを次の段階への展開の足がためにしたいと思う。

二

アンコール＝ワット Angkor Vat[1] は人類が曾て建造した最大の宗教建築であり、その壮大なこととその豪華さとが渾然一体をなしていて、他にその類例を見ないと言っても言い過ぎではないであろう。われわれはまずその全体の建築構造を見ることにしよう。

シエムレアプのホテルから車で数分間北上すると、ア



アンコール＝ワット

ンコール＝ワットの南側の濠につきあたる。左折して、アンコール＝ワットを右側に見ながら、さらに右折して約六百メートル余り、アンコール＝ワットの西門に到着する。これがアンコール＝ワットの正門である。一段と高い参道の入口の両側に一対の唐獅子の像があり、われわれを出迎えてくれる。見れば、アンコール＝ワットは幅広い濠（約二百メートル）に囲まれて、池に浮かぶ城郭をしのばせる。だが、城郭というには全体の結構は余りにも壮麗であり、またその一部を凝視すると余りにも繊細であり、その調和と綜合の美しさは表現する言葉に苦しむほどである。濠の外側の長さは東西が千五百メートル、南北が千三百メートルで、全体は東西に長い矩形をなしている。なお、東参道は土塁のままで舗装されておらず、南北には濠を渡る参道はない。西参道の両側には、積石の上にナーガの欄干があり、ナーガの頭の高さは約四メートルである。濠の内側と第一劃の周壁との間に、約三十メートル幅の通路がある。

第一劃の周壁はラテライトと砂岩づくりで、その長さは東西が一千メートル、南北が八百十五メートルであ

る。西の入口は十字形のゴープラ（楼門）で、三つの楼閣から成り、それぞれの頂には塔があり、二百メートル以上に及ぶ回廊で結ばれている。そして、両端には象や車の通る門がある。中央塔の正門の手前から東向きに見ると、正門の入り口を通してアンコール＝ワットの中央の高さ六十五メートルの塔が遠望される。

第一劃の塔門を通り抜けると、長さ約三百五十メートルの舗装された参道がつづく。幅は約十メートル、左右の地面から一メートル六十ほど高い。この参道の両側にもナーガの胸墻がある。参道の中ほどの両側に、経蔵の跡と見なされる建物がある。第二劃の低い石壁の手前のところの両側に、聖池がある。向かって左側は水を湛えていたが、右側のは草茫々であった。

第二劃は低い石造の壁で囲まれ、東西は約三百四十メートル、南北は約二百七十メートルである。第二劃は第一劃の地面より約二メートル高い土壇から成り、この土壇は西側で幅が八十メートルであり、他の三方向では四十メートルである。参道が第二劃に入ると、直ぐに第一回廊の入口の階段に通ずる高さ二メートルほどの十字形の大きなテラスがあり、第二劃の地面に降りる幅二メートルの階段が参道の両側にある。このテラスの奥に塔門があり、種々の浮彫のある第一回廊はここから左右に分かれる。

第一回廊が囲む第一テラスは東西二百十五メートル・南北百八十七メートルで、第二劃の地面より三メートル五十高くなっている。四十五メートル四方の天井のある中庭があって第二テラスにつづくが、この中庭には三本の廊下があり、第一と第二の両テラスの三つの入口をつないでいる。中央の廊下の半ばに左右に通路の腕が出て左右の廊下につながり、中庭は四つに区分されている。腕の部分の両端に第一テラスに降りる階段がある。第一テラスの西の入口の両側にそれぞれ小祠堂がある。第二テラスの大きさは東西百十五メートル・南北百メートルで、第一テラスより七メートル高くなっている。第二テラスの周囲の牆壁の四隅には塔があるが、著しく破損している。東・南・北の三面の回廊は、外側には独自なくり形のある縦格子をはめた盲窓となっており、内側には奇妙で複雑な髪形の天女の浮彫が数多く見られる。な

お、東・南・北側の中央にそれぞれ出口があり、四隅の塔にはそれぞれ二つの出口があって、第一テラスに降りることができる。

第三テラスは七十五メートル四方で、第二テラスよりも十三メートル高い。四方の中央に一つ、四隅に二つの急な階段があって、下の第二テラスに降りられるようになっている。西側正面中央の階段の数は三十八であり、その傾斜角度は四十五度の急勾配になっている。四隅には塔が聳えているが、これらの塔は第二テラスの四隅のものより大きく、しかも現在の保存状態は比較的に良好である。中央塔の歩廊は第三テラスの床から数メートル高い。中央塔はアンコール＝ワットの他のいずれの塔よりも大きく、四十二メートルの高さがあり、その頂は周辺の土地より六十五メートルの高さに聳えているという。

以上、アンコール＝ワットの建設構造を比較的詳細に記述したのは、その特異な姿を明確に把握して頂きたいがためである。今日、アンコール遺跡の諸建造物をその写真と平面図で見たときに知られることと、アンコール＝ワットのそれとは全く異なるからである。その点については後で触れるとして、ここでアンコール＝ワットの第一回廊の内壁に全長七百六十メートルにわたって描かれる浮彫について記述する必要がある。まず、今日一般に行なわれている見物の進行方向に従って、西側正面の塔門から右に道をとることにしよう。これは時計の針の反対にまわることで、インドではプラサヴヤ prasavya といい、葬式の際の歩き方で、近くは昭和五十九年十一月三日にガンジー首相の火葬の行なわれたとき、テレビの画面にはっきりと見られた。それはそれとして、入口の塔門から右に折れると、

西回廊南側（WS）。長さ五十メートルに及ぶ浮彫が拡がり、そのテーマはインドの叙事詩『マハーバーラタ』のテーマであるカウラヴァ軍とパーンダヴァ軍の大戦争の場面である。十八日のあいだクル＝クシェートラ（クル平原）に繰りひろげられた両軍の戦いは、激戦の結果カウラヴァ軍が潰滅し、パーンダヴァ軍の勝利に終るのであるが、この壁面に見られるパーンダヴァ軍のアルジュナ王子が戦車の上で勝ち誇っている姿は極めて印象的である。何故なれば、この戦いに際しパーガヴァタ派の

教祖であるクリシュナ Kṛṣṇa がアルジュナに語った烈烈の言葉が、のちにヒンドゥー教の経典として今日もなお数億の教徒に無限の福音をもたらすという『バガヴァッド＝ギーター』Bhagavad-gītā の中に凝集されているからであり、しかもクリシュナは実にヴィシュヌ神の権化であるからである。アンコール＝ワットのこの壁面に関して最も重要な宗教的意義がこの点にあることを忘れてはならない。しかも、壁画面を詳しく検討すると、カウラヴァ軍は壁面の左側から進軍しており、それが右から進軍してくるパーンダヴァ軍に敗れるという構図は、この壁面のアンコール＝ワット浮彫に占める位置を考える上で、極めて重要な示唆を与えると考えられる。次に、

南回廊西側（SW）。全長九十八メートルに及ぶ浮彫は、アンコール＝ワットの建設者スールヤヴァルマン Sūryavarman 二世の偉業を讃美するものであって、政庁において玉座に悠然と坐って政務を見る王の姿や威風堂々と近衛兵を従って閲兵する王の姿、さらにはクメルの将軍に率いられたルヴォ Lvo (Lopburi) の軍勢、タイ族の傭兵など、極めて生々と描かれている。次に、

南回廊東側（SE）。全長六十六メートルのこの壁面は、上段が極楽で下段が地獄の様相を描き、死後における人間審判の図とされる。棍棒を振って審判をするヤマ「閻魔」の姿があり、地獄に突き落とされる罪人の姿が克明に描かれている。

東回廊南側（ES）。アンコール＝ワットの案内書・解説書に必ずと言ってよいほどに見られる「乳海攪拌」の図である。五十メートルの壁面に見られる浮彫はインド神話に有名なサムドラ＝マタナ samudra-mathana を題材とし、その均整のとれた躍動美は他に類例を見ない。中央にヴィシュヌ神が亀の背の上にマンダラ山をのせて攪拌棒とし、毒蛇ヴァースキを大縄としてそれをまわしている。蛇の頭の部分を八十八名のアスラがかかえ、尾の方を八十五名の神がかかえて、お互いに引き合ってマンダラ山をまわし、乳海を攪拌するところを描いている。不思議なことに、神々の最後尾に近く『ラーマーヤナ』の英雄である猿王ハヌマンの姿が見えることであり、これがこの壁面の浮彫が単に乳海攪拌の神話を描いたものでないことを示唆するかと思われる。次に、

東回廊北側（EN）。ヴィシュヌ神とアスラ軍との戦いを描く。中央にガルダ鳥（迦楼羅）にまたがって、ムラ・ニスンダ・ハヤ＝グリーヴァ・パンチャ＝ナンダの四アスラを倒す神話に基づく。怪獣のひく戦車に乗り突進するアスラ軍、大きな鳥に乗って矢を放つアスラ軍など、神話世界の雰囲気を荒々しく伝えている。次に、

北回廊東側（NE）。『マハーバーラタ』の補遺である『ハリ＝ヴァンシャ』Harivaṁśa（ハリすなわち「ヴィシュヌ神の家系」）の一節「バーナとの戦い」をテーマとする。獅子を先導とし、戦車に乗って二十二本の手にそれぞれ棍棒を持ち、それを振り廻しながら奮戦するアスラ王バーナ、それを迎え撃つクリシュナすなわちヴィシュヌ神の権化、それに味方してアスラ討伐に象に乗って進む神神などが描かれる。なお、この浮彫（NE）と前項のEN の二壁面は、美術史的に見て、かなり後代の作であるとされる。次に、

北回廊西側（NW）。同じく『ハリ＝ヴァンシャ』のエピソードに由来し、クリシュナとカーラネーミの争いの神話を描く。神とアスラ軍の戦いを描く点で、NEならびにENと軌を一にするが、手法に若干の差があり、特にNEのそれとの間が甚しい。製作年代の相違によるか、製作者の出自が異なるか、いま簡単に論ずることはできないが、ただこの壁面にはヒンドゥー教の数多くの神々の姿が見られる点に興味深いものがある。次に、

西回廊北側（WN）。ランカー島の戦闘の場面で、『ラーマーヤナ』に題材を仰ぎ、全長五十メートルの壁面に見られるハヌマンの肩に乗って戦うラーマの姿とか十頭二十手の魔王ラーヴァナの戦う姿とかは、同じテーマを描くバンコクのワット＝プラケオの壁画やワット＝ポーの浮彫に比べて、真に迫る力強さを感じさせる。

なお、西側の両端にある楼門にも、『ラーマーヤナ』に由来するシーンの浮彫があるが、そこに見られる人物像は約一世紀おくれて建立されたアンコール＝トムのバヨンのそれに類似しており、また手法にもアンコール＝ワットの壁面とは相違が見られる。

三

アンコール＝ワットは前述のように十二世紀の前半に

スールヤヴァルマン二世ならびにその直接の後継者によって建立されたのであるが、その謎を解くには、まず、そこに至るまでのカンボジアの歴史の概要[2]を知る必要がある。

さて、カンボジアはクメル人の国であるが、今日に知られる最古の国家は中国史料に見られる真臘である。真臘の名の由来については、いまだ適切な説明が与えられていないのは遺憾であるが、中国人は十三世紀の周達観の『真臘風土記』に至るまで常にクメルおよびカンボジアに対して、この名を用いている。

ところで、カンボジアの歴史は九世紀から十五世紀前半に至るまでのアンコール時代を中心に、美術史家のいう先アンコール期（六・七世紀）と、南進するタイ族の勢力に圧迫されて都城アンコールを放棄したのちの後アンコール期に分かたれる。後アンコール期（一四三二年以後）は今しばらく措くとして、先アンコール期については若干の王名とその業績が碑文資料からも知られるが、注目すべき宗教史上の事実は初期の王でメコン Mekong 河中流地域のバサック Basak 地方にあったとされる首都シュレーシュタ＝プラ Śreṣṭhapura の建設者シュレーシュタヴァルマン Śreṣṭhavarman（六世紀）が、王都の近くの山にバドレーシュヴァラ Bhadreśvara というリンガ liṅga を祀り、そのためにこの山はリンガ＝パルヴァタ Liṅgaparvata「リンガの山」と呼ばれたということである。この所伝は、既にこの頃に、この地方にシヴァ神の信仰が行なわれていたことを示す。また、『隋書』八二（列伝四二）真臘の条には、この国の習俗が明らかにインド起源のものであることを示していて、この国の文化の基盤がインド文化であったことを如実に物語っている。七世紀の終りに、ジャヤヴァルマン Jayavarman 一世の治世（ほぼ六五七―六八一）には、カンボジアの勢力はバサック地方からシャム湾沿岸地域にまで伸びていたことが知られる。

そのあと、カンボジアは分裂に見舞われるのであり、中国史料に依れば八世紀を通じて中部メコン地域とダンレク山脈北方の陸真臘と、ほぼ現在のカンボジア全域とメコン＝デルタ地帯に勢力を持った水真臘とに分裂していたことが知られる。しかも、当時いくつかの小王国あ

るいは小勢力に分かれていた水真臘は、八世紀半ばに中部ジャワを中心に擡頭したシャイレーンドラ Śailendra 王国の勢力下に併合されていた。このように分裂していたカンボジアを統一したのは、八〇〇年ごろにジャワから帰国したカンボジアの貴公子であった。その間の事情は明らかではないが、ジャワに亡命していたか捕虜となっていたと思われる。この人は曽てのカンボジアの王家と血のつながりがあったとされ、八〇二年に即位したジャヤヴァルマン二世である。その治世は九世紀の前半の大半にわたるが、数度にわたって都を変えたことは国内平定に努力したことを示唆する。しかし、彼はカンボジアの歴史において、アンコール王国の精神的な支柱と経済的な基盤に大きな業績を残した。その第一は、爾後十五世紀に至るまでアンコール王国の国家宗教ともいうべき神王 devarāja（クメル語 Kamraten jagat ta raja）崇拝の基礎を確立したことである。彼はプノム＝クレン Phnom Kulen の王に天上の王であるマヘーンドラ Mahendra「偉大な王者」というリンガを奉祀して、その地で即位した。このことにより、後にマヘーンドラ＝パルヴァタと呼ばれたこの丘に祀られるリンガは、シャイレーンドラ王国の宗主権をたち切った記念としてクメル族の王国の勝利と栄光のシンボルであり、また後にはアンコール王国の霊魂の住処と見なされたのである。碑文の中で、ジャヤヴァルマン二世はしばしばパラメーシュヴァラ Parameśvara（最高の支配者）と記されるが、この称号はシヴァ神の尊称の一である。こうして、サンスクリット語では「神の王」（インドラ）と理解された devarāja という格限定複合語は、同格限定複合語として「王なる神」と改釈され、リンガで表象されるシヴァ神の呼び名になったことが窺われる。

ジャヤヴァルマン二世のもうひとつの偉業は、ハリハラーラヤ Hariharālaya に都を定めたことである。彼はこの地で死んだのであるが、この地は現在アンコール地区の中心であるシェムレアプ Siemreap の南東十三キロメートルの地点にあり、アンコール地区の入口にあたる。この地はトンレ＝サップ Tonle Sap 湖に近くて魚が豊富であり、しかも前面に拡がる広大な水田は適切な灌漑により大きな人口を養うのに十分な食料の供給地で

あった。ジャヤヴァルマン二世がこの土地を都に定めたのはアンコール地区の利点を正しく評価したことを意味する。この王の勢力は確かにトンレ＝サップ湖の北の地域を越えなかったけれども、彼は十五世紀前半に及ぶ新しい王国の基礎を築いたのであった。

ジャヤヴァルマン二世の次の次のインドラヴァルマン Indravarman 一世（八七七―八八九）は、即位すると間もなく、都ハリハラーラヤの北に巨大な貯水池インドラ＝タタカ Indra-tataka を築き、首都に水を供給する運河組織を完成させた。そして、八八二年には、ピラミッド型段台のバコン Bakon を首都の中央に築き、インドレーシュヴァラ Indreśvara というリンガを安置した。このバコンとインドラ＝タタカとは、明らかに神話でシヴァ神の本拠とされるカイラーサ Kailāsa 山とその麓にあるマーナサ Mānasa 湖とを模倣したものである。そのち、この形式はアンコール期を通じて大抵の寺院の場合に見られ、カンボジア建造物複合の特色をなしている。

インドラヴァルマンの子ヤショーヴァルマン Yaśovarman 一世が八八九年に王位に即いた。この王はアンコール地区の重要性に鑑みて、ハリハラーラヤの西北に、一辺四キロメートルの四辺形の新都ヤショーダラ＝プラ Yaśodharapura の建設に着手した。プノム＝バケン Phnom Bakheng の丘を都の中心とし、その頂上に「王のリンガ」ヤショーダレーシュヴァラ Yaśodhareśvara を祀った。それと同時に、首都ならびに国土の水利体系を安定させるために、都城の北東に長さ七キロメートル・幅二キロメートルの巨大な貯水池を造り、プノム＝クレンから流れでるシエムレアプ川の水をひいた。この貯水池はヤショーダラ＝タタカ Yaśodhara-tataka と命名された。現在、遺跡ののこる東バライ Baray のことである。

ヤショーヴァルマン一世の治世（八八九―九一〇ごろ）のあと、その直系の後継者たちと一族のジャヤヴァルマン四世との間に王国は分裂し混乱したが、九四四年に地方勢力としてバヴァ＝プラ Bhava-pura の王であったラージェーンドラヴァルマン Rājendravarman 二世がアンコール王国の王位に即き、改めてヤショーダラ＝プラを首都とし、その復興に着手した。九五二年には、ヤショーヴァルマン一世が築いた巨大な貯水池の中央に、「王のリンガ」ラージェーンドレーシュヴァラ Rājendreśvara を安置した寺院を建立した。これが東メボン Mebon である。ついで、九六一年には、同じ貯水池の南にバドレーシュヴァラ Bhadreśvara というリンガを祀るプレ＝ルプ Pre Rup 寺院を建立した。九六八年に王位を継承した息子のジャヤヴァルマン五世の治世（九六八―一〇〇一）には、国内は平穏で、新都の造営が進められたかと思われる。その歿後、王位の継承をめぐって争いが起こった。

九年にわたる内乱の後、一〇一〇年に出自不詳のスールヤヴァルマン Sūryavarman 一世がアンコール王国の王位に即き、ヤショーダラ＝プラに都し、王宮の中にピメアナカス Phimeanakas 寺院を造営した。この王は仏教信者であったというが建立した寺院はヒンドゥー教の寺院のみで、特に国家の守護神シヴァの熱烈な信者であった。この王の治世（一〇一〇―一〇五〇）にアンコール王国の勢力はモン族の曾ての中心地であったメナム Menam 河流域のロブブリ Lopburi にまで伸展し、また国内的にはトンレ＝サップ湖の西部地域の開発が進んだ。

スールヤヴァルマンのあとに、ウダヤーディティヤヴァルマン Udayādityavarman（一〇五〇―一〇六六）が王位に即き、「王のリンガ」を祀るバプーオン Baphuon をピメアナカスの南側に建立した。さらに、恐らくは都城の人口の増加からヤショーダラ＝タタカ（東バライ）の水量の絶対の不足をきたしたためと考えられるが、都の西に長さ八キロメートル・幅二キロメートルに及ぶ巨大な貯水池を築いた。これが今日の西バライである。今日、アンコールの地図を見て、スールヤヴァルマンの建立したピメアナカス寺院、ウダヤーディティヤヴァルマンの前記の二つの造営工事のあとを検討してみると、曾てヤショーヴァルマン一世の計画したヤショーダラ＝プラの設計が変更され、第二次ヤショーダラ＝プラが新しく造営されるに至ったことが知られる。すなわち、プノム＝バケンを都城の中心とする案が変更されて、第一次ヤショーダラ＝プラの北辺を新都城の中央の東西に通ずる道路とし、プノム＝バケンの東側に新都城の北大門から南大門を通って南北に貫く都大路が造られたことが歴

然としているからである。第二次ヤショーダラ＝プラは北大門と南大門を結ぶ線を東西の中心とするほぼ三キロメートル四方となり、第一次に比べて規模が少し小さくされたことが知られる。(3)

ウダヤーディティヤヴァルマン二世の治世におこった国内の反乱と、そのあとに起こったチャムパー Campā との抗争は必然的にアンコール王国の弱体化をもたらしたが、この間に王国の北部に根拠をもつマヒーダラ Mahīdhara 王家が擡頭してきて、一〇八〇年にジャヤヴァルマン六世（一〇八〇―一一〇七）としてアンコール王国に登場した。そして、一一一三年に至って、その甥のスールヤヴァルマン二世が即位すると、約半世紀にわたったアンコール王国の不安定な状態は漸く落着きを取り戻した。この王の治世は近隣諸国との争いに忙殺された時期であったが、結局は東はチャムパー王国から西はパガン Pagan 朝のビルマまで、北はモン族のハリプンジャヤ Haripuñjaya 王国（現在タイのランプン Lamphun）から南はマライ半島のグラヒ Grahi に至るまで領土を拡張し、その勢力は広大な範囲に及び、アンコール王国の最盛期とされる。

スールヤヴァルマン二世の数多い造営事業の中で最も偉大なものはアンコール＝ワットの建立である。アンコール＝ワットは第二次ヤショーダラ＝プラの外城の部分で南北に通ずる都大路の東側に建立されたが、この建造物はもはやリンガを祀る段台ではなく、ヴィシュヌ神をデーヴァラージャの象徴とする寺院であることは明らかである。スールヤヴァルマンの死後に、アンコール＝ワットは王の霊廟となり、王はパラマ＝ヴィシュヌ＝ローカ Parama-viṣṇu-loka「ヴィシュヌ世界に登った者」の名で祀られた。

スールヤヴァルマン二世は一一四五年のあと、なんら知られない。一一五〇年以後、アンコール王国内に何度か内訌があり、また国内の混乱に乗じて一一七七年にはチャムパーの水軍が河を遡って進撃し、ヤショーダラ＝プラを占領した。これらの内憂外患のアンコール王国の危機を救ったのは、マヒーダラ王家の血をひくジャヤヴァルマン七世で、四年にわたってチャムパーの侵入を駆逐し、漸く一一八一年に即位した。まず、一一九〇年に

戦いを挑んできたチャムパー王を敗走させ、一二〇三年から一二二〇年にかけてチャムパーをカンボジアの一部として併合した。ジャヤヴァルマン七世は、その四十年にわたる治世（一一八〇―一二一八）の間に、外征面では北はラオスの現在のヴィエンチャン地方にまで支配をのばし、西はメナム河下流地域からパガン王朝のビルマ国境まで、またマライ半島の北部にまで、その勢力が及んだ。また、内政でも、彼は注目すべき偉大な事業を完成した。国内に百二の病院を建て、百二十一の宿駅を設けて王都から地方に至る各道路に配置した。さらに、一一八六年には母の追善供養のためにタ＝プローム Ta Prohm 寺を、ついで一一九一年には父の冥福を祈るためにプラ＝カン Pra Khan 寺を造営し、そのほかネアク＝ペアン Neak Pean 寺院、バンテアイ＝クデイ Banteay Kdei 寺院、バンテアイ＝チュマル Banteay Chmar 寺院などを建立したが、その中でも最も偉大な建造物はアンコール＝トム Angkor Thom の中心に建造されたバヨン Bayon である。アンコール＝トムすなわち第二次ヤショーダラ＝プラの中心にあってデーヴァラージャの象徴を祀る寺院であるが、塔の四面に微笑を浮かべたローケーシュヴァラ Lokeśvara「世自在」の巨大な顔の彫刻で飾った。ローケーシュヴァラは北伝の仏教における観世音菩薩の後代のインドにおける姿であり、シヴァ神信仰と観音信仰の習合を示すものである。仏教信者としてマハー＝パラマ＝サウガタ Mahāparamasaugata「偉大にして最高の仏教信者」という諡号をおくられたジャヤヴァルマン七世が、仏教信者としてアンコール王国の王権のシンボルであるシヴァ神と仏教信仰との総合を具体化するために、バヨンの塔の壁面をローケーシュヴァラの顔で飾ったと見るのは、考え過ぎであろうか。ジャヤヴァルマン七世は一二一八年に死歿し、そのあとアンコール王国にその子孫が数代にわたって君臨したが、昔日の面影は全くなかった。十四世紀から十五世紀にかけてタイ族の大規模な侵入を受け、遂に一四三二年にはアンコールの首都を放棄するの止むなきに至った。

四

以上、第二節にアンコール＝ワットの結構を比較的に

詳細に記述し、第三節においてはカンボジアの歴史を王と建造物とを中心に略述したのは、アンコール＝ワットの謎を解くために必要と考えたからである。それでは、その謎とは何か。

まず第一に、アンコール＝ワットは何故に西向きになっているかということである。アンコール時代の建造物はすべて東向きである。アンコール＝トム（第二次ヤショーダラ＝プラ）におけるバプーオン・ピメアナカス・バヨンはいずれも東向きであり、第一次ヤショーダラ＝プラの中心プノム＝バケンもそうである。また、城外の諸建造物いずれも東向きである。[4] これらの諸建造物が何故に東向きであるのか、その理由は未だ明らかにされていないが、アンコール＝ワットのみ西向きであるのは不可解といわねばならぬ。筆者はアンコール時代の建造物がすべて東向きであることに対し、現在ある仮説を持っているが、未だ不十分なので、ここではこの東向きである事実を既定の事実として、その前提の下にアンコール＝ワットの西向きの問題を考えてみたい。

第三節に記したように、ヤショーヴァルマン一世（八八九―九一〇）がプノム＝バケンを中心とする新しい都城ヤショーダラ＝プラの建設に着手した。そして、その予定地の東側に、幅二キロメートル・長さ七キロメートルという人造湖ヤショーダラ＝タターカを築いた。約五十年後、恐らくはこのタターカの峻工を記念してであろうが、ラージェーンドラヴァルマン二世はこのタターカの中心に「王のリンガ」であるラージェーンドレーシュヴァラ＝リンガを祀る寺院（東メボン）を造営した。さらに、都城の東・タターカの南にバドレーシュヴァラ＝リンガを祀るプレ＝ルプ寺院を建立した。こうして都城の東側が整備されたのであるが、約半世紀後にスールヤヴァルマン一世（一〇一〇―一〇五〇）はヤショーダラ＝プラの最初の計画の外側にピメアナカスを造営し、さらにウダヤーディティヤヴァルマン（一〇五〇―一〇六六）は王のリンガを祀るバプーオンをその南側に建立した。この前を南北に通ずる道路は、そのまま南下すれば、当初の計画で都城の中心であったプノム＝バケンの東側に達する。そして、この道路を都大路とした第二次計画が三キロメートル四方の新都城のちのアンコール＝トムとなる訳である。ウダヤーディティヤヴァルマンはまた西バライを構築したが、この東側は第一次ヤショーダラ＝プラの西側の線に一致する。これは恐らく先代のスールヤヴァルマン一世の時代、いなそれ以前のラージェーンドラヴァルマンの時代ころから、恐らくは第二次ヤショーダラ＝プラの構想以前から、既に建造中であったことを意味しよう。

さて、ここから問題が展開する。歴史的に、東バライのあとに西バライが築かれたことは疑いえない。とすれば、アンコール＝ワットは第二次ヤショーダラ＝プラの南北を通ずる都大路の東側に建立された東寺であり東大寺であったと考えられよう。では、何故に第二次ヤショーダラ＝プラの城外に建立されたのか。それは、ヴィシュヌ神を祀る寺院であったからであると考えられる。アンコール王国の王権のシンボルはリンガであり、シヴァ神信仰を基調とするデーヴァ＝ラージャ「神王」の思想がアンコール王国の国家宗教の中核であったからである。パラマ＝ヴィシュヌローカの諡号をおくられたほどにヴィシュヌ神を信仰し、みずからをヴィシュヌ神の権化とさえ自負していたスールヤヴァルマンも、ヴィシュヌ神の祠堂を既にシヴァ＝リンガの祀られた第二次ヤショーダラ＝プラの内部に敢て造営して、アンコール王国の伝統ある信仰に逆らうことはできなかったのではないかと考えられる。そして、都城の外城に思いきり広い土地を選んで、と言って第一次ヤショーダラ＝プラの東側の濠を越えることはできないで、その東の濠と都大路の間にまず「東寺」として、ヴィシュヌ神を祀るアンコール＝ワットすなわち「都城の寺院」を建立したのである。その名は明らかにスールヤヴァルマン二世の意図を現わすものであり、その心の中には「西寺」を建立する意図があったであろうと思われる。しかし、アンコール＝ワットそのものの造営の終らないうちに、スールヤヴァルマン二世は死歿した。アンコール＝ワットは「都城の寺院」として東寺であるが故に西を向いているのである。スールヤヴァルマン二世の願いの満たされないまま、王国は乱れ、「西寺」の建立される前にジャヤヴァルマン七世が即位し、仏教信者として、アンコール王国の伝統を無視することができず、仏教とシヴァ信仰の習

合したローケーシュヴァラをもってきて、アンコール＝トムの中心であるバヨンの塔を飾ったことが考えられる。そののち、アンコール王国に昔日の栄光と繁栄はなく、アンコール＝ワット西寺は遂にそののちも建立されなかったというのが実状であろう。現在のアンコール＝ワットは東寺であり東大寺であったが故に、都大路に面する西側を正門とし、西向きになっているのである。

次に、アンコール＝ワットの第二の謎は、今日アンコール＝ワットの第一回廊の浮彫を見る人は、時計の針とは反対の方向にまわるという問題である。これは、アンコール＝ワットが寺院か墓かという問題と関聯があり、若干の説明を必要としよう。十三世紀にこの地を訪れた中国の周達観は、アンコール＝ワットを「魯般の墓」と記す。魯般とはスールヤヴァルマン二世のカンボジア語名の写音であろう。爾来、伝説も交えてアンコール＝ワットは墓とされ、その故に西を向いているという説明もなされた。一九一一年にセデスは回廊の浮彫を詳細に検討して、それが本質的にヴィシュヌ信仰の性格があり、従ってアンコール＝ワットは元来ヴィシュヌ寺院であると論じた。[5] この説はわれわれを十分に納得させるものであったが、一九三三年に至ってプシルスキが異論を唱え、この建造物を寺と呼ぶことに反対し、これは原初的には墓であって寺院ではないと主張した。[6] その主張の根拠は、ヒンドゥーの宗教儀礼で礼拝の対象を常に左手に見て行列が左から右に動く場合はプラサヴヤ prasavya といい、墓の場合にもそのように行なわれる。寺院においては、行列は反対の方向（すなわち時計の針の進む方向）に動き、プラダクシナ pradaksina「右遶」を行なう。アンコール＝ワットの第一回廊の浮彫を視る場合、一般に人はプラサヴヤを行なう。従って、この建造物はもともと墳墓として造営されたものである、というにあった。プシルスキは、一九三七年にこの問題を蒸しかえし、アンコール＝ワットは王城から離れていて、アンコール＝トムの東南にあるのは、死者は生きている者と一緒に住んではならず、南東の方角は死者の領域にあるからである。アンコール＝ワットの正門は西の方角にあり、これは沈む太陽の方向である。アンコール＝ワットの回廊の浮彫はプラサヴヤの方向に並んでおり、アン

コール＝ワットが寺院であったとすれば、浮彫はプラダクシナの方角でなければならないであろう、と主張したのである。[7] これに対し、セデスは反論し、それぞれの壁面で浮彫が左から右に進んでいるのは彫刻師の便宜によるもので、正確に左右相称（シンメトリカル）的な型に従って並べられているのではない。この建造物の葬送的な性格は認めるとしても、建築や装飾は明らかに寺院であることを示しており、そこには神が祀られていて、王は生前に既に神と同一視されていたであろうとし、「墳墓寺院」という語を用いるよう示唆した。[8] この語は既にオランダの考古学者ボス F.D.K. Bosch が提唱し、[9] フィノ L. Finot が賛意を表していたところである。[10] セデスはさらにジャヤヴァルマン七世の治世の大建造物を調査して、死んだ王の棺として用いられたと思われる石の容れものを発見し、今日プノンペンやバンコクで見られるように火葬のあとに骨灰を収めたものであるとし、当時カンボジアと同じくヒンドゥー文化の影響を受けていたジャワおよびバリの寺院の葬送に関連あることを検討し、アンコール＝ワットは墳墓ではあるが、建造物と異なるのは、それが西向きであるということのみであり、最初からその祠堂の中に神と見做された王の像をかくまうように予定されていた、という結論に達した。そして、中央にある偶像が王の死体もしくは骨灰の上に置かれて祀られるというタイプの建物は墳墓寺院というよりほかに言いあらわしようがない、という。[11]

キリスト教徒でないわれわれにとって、セデスの意見も当然すぎるほどのことで、何を取り立てて論議するのか不思議なほどであろう。アンコール＝ワットが寺院か墳墓かを論ずるよりも、すなわちアンコール＝ワットがスールヤヴァルマン二世の墳墓であり、この王を祀る寺院であることは明確な事実として、先に進むことにしよう。アンコール＝ワットがヴィシュヌ信仰と関聯のあることは、セデスの論じた通りであり、その根拠は第一回廊に繰り拡げられる八種の壁画の描くところにある。われわれは、もう一度その描くところを繰り返すことにする。すなわち、

WS 『マハーバーラタ』のバラタ戦争。

SW スールヤヴァルマン二世。

SE　極楽と地獄。
ES　乳海攪拌。
EN　ヴィシュヌ神とアスラとの戦い。
NE　クリシュナとバーナとの戦い。
NW　クリシュナとカーラネーミとの戦い。
WN　『ラーマーヤナ』のランカー島の戦い。

となろう。この順に見たとき、壁面に描かれた浮彫にはなんら連絡が認められないことは、だれしも了解するであろう。「アンコール＝ワットの浮彫はプラサヴヤの方向に並んでいる」とプシルスキは言うが、浮彫の画面をどのように解釈しての所説か、理解に苦しむところである。ボスは、浮彫を東・北・西・南の順に見るとき、ある関連性が認められるという。[12] その関連性とは、セデスの所論を引き合いに出すまでもなく、ヴィシュヌ神信仰であることは、ヒンドゥー教の初歩の知識のある者にとっては容易に理解されよう。

さて、ここでヒンドゥー教の初歩の知識とは、ヴィシュヌ神のダシャ＝アヴァターラ Daśa-avatāra「十種の権化」のことである。周知のように、ヴィシュヌ神はヒンドゥー教の三大神の一であり、世界救済の目的で十種に姿を変え、この世に顕現するとされる。すなわち、

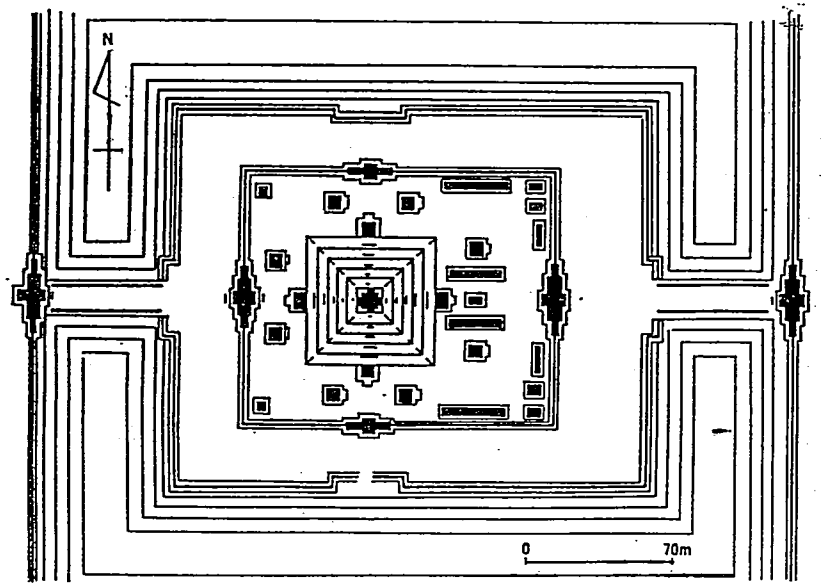
（一）魚（マッヤ）。（二）亀（クールマ）。（三）野猪（ヴァラーハ）。（四）人獅子。（五）矮人（ヴァーマナ）。（六）パラシュラーマ。（七）ラーマ。（八）クリシュナ。（九）ブッダ。（一〇）カルキ。

の十種である。[13] アンコール＝ワットでは、この中で（七）と（八）のみの姿が見られるが、ヒンドゥー教ではこの二者が最も人気のある権化であるからである。もう一つここに考えねばならないことはESの「乳海攪拌」の神話の解釈である。この神話は『マハーバーラタ』にも『ラーマーヤナ』にもプラーナ文献にも見えるが、これは創造神話であり、そこに海があらゆるものの起源であることを寓意し、[14] 且つハヌマンが登場していることを考えると、この神話は国土建設の譬喩として、この壁面に描かれたと考えるのが当然と思われる。かくして、アンコール＝ワット第一回廊の浮彫はWNから始めて、次のように解釈されよう。

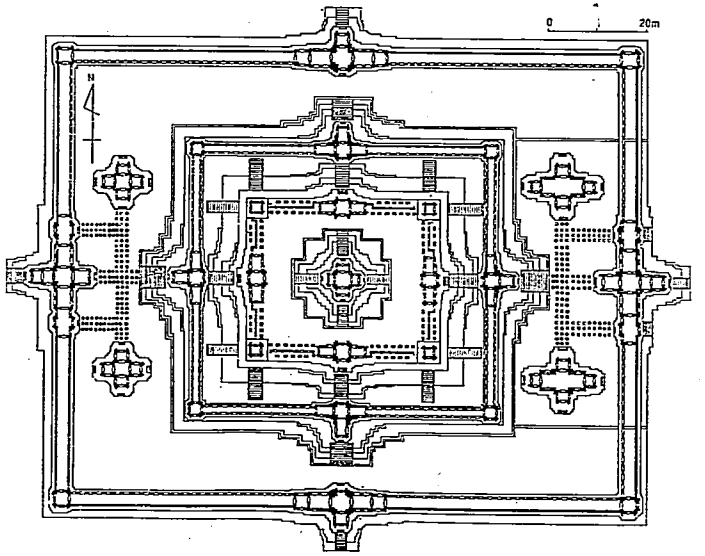
WN　われには、ラーマが魔王ラーヴァナを倒したように猿軍の味方あり。
NW　われには、カーラネーミをクリシュナが殺したときのように諸神の味方あり。
NE　われはアスラのバーナを征伐するクリシュナである。
EN　われはガルダ鳥にまたがってアスラの軍勢を迎えうつヴィシュヌである。
ES　かくして、アスラを従えたわれは、その協力をえて、またハヌマンに鼓舞されて、国土を建設した。
SE　われの統治する国は正に天国であり、われに従わざる者は地獄の苦しみを受けよう。（「極楽と地国」は政治的プロパガンダの譬喩として用いられたと考えられる）
SW　かく申すわれはスールヤヴァルマンである。わが麾下の大軍団の威風堂々たるを見よ。
WS　かくて、戦わんとすれば、曾てアルジュナを鼓舞激励したクリシュナの声のように、天の声があって、敵軍を立ちどころに征服しよう。（勝利をうるパーンダヴァ軍が右に、敗退するカウラヴァ軍が左に描かれているのは、この浮彫を見る方向に極めて示唆的である）

このように見るとき、全壁面の浮彫は一連のものとなり、それぞれの壁面の表現するところも一段と意味の重いものとなろう。そして、このように見て廻ることこそ、アンコール＝ワットを真に理解するものというべきである。この廻り方、すなわち礼拝の対象を常に右側にしながら（時計の針の進む方向に）まわるのが、インド古来のプラダクシナ（右遶）である。なお、プラサヴヤは葬送の儀礼であって、墳墓に対する儀礼でないことを知るべきである。

アンコール＝ワットの第三の特徴は、その建造物複合の形である。アンコール＝ワット以前の時代における建造物は、八八二年のバコン以後、十一世紀後半のバプーオンに至るまでピラミッド型段台で、一般にシカラ sikhara 建築といわれる。[15] シカラとは梵語で「頂」を意味し、しかもシヴァ神に関して用いられる。すなわち、シヴァ神はカイラーサ＝シカラ＝ヴァーシン Kailāsa-



バコン



バプーオン

śikharavāsin「カイラーサ山の頂に住む者」とかカイラーサ=シャイレーンドラ=シカラ=スティタ Kailāsa-śailendraśikharasthita「カイラーサという山の王者の頂に居る者」といわれ、従ってアンコール時代のシカラ型の各建造物はまさしくシヴァ=リンガの安置処として当然の場処であったといわねばならぬ。従って、カイラーサ山の麓にあるマーナサ湖にならって、それぞれの建造物の近くにタターカ（人造の貯水池）が掘削されたのである。ところが、アンコール=ワットに至って一応シカラ建築に倣って段台になっているが、その上に塔が九つあって、従来の建造物に対して一変している。これは何を意味するか。シヴァ神からヴィシュヌ神に変ったためと言っても、塔の「九」という数が説明されない。筆者は、ここに結論のみを言えば、ヴィシュヌ神信仰の擡頭とともに古くからインドに伝承されたスメール（須弥）山の九山八海の神話が復活したと考える。ヒンドゥー教において世界の中心とされるスメール山は、プラーナ文献の若干に見られるだけで、その後は姿を消し、そのちはメール山とカイラーサ山の名が登場する。この場合、スメールとメールはヒンドゥー教では同じであるが、仏教徒の間では異なることを忘れてはならぬ。なお、この問題に関して、アンコール=ワットの浮彫は同時的な描写で、絵巻物のように時間的でもなく、パノラマ的でもないこと、そしてインド人の描写法は同時的であることを考えると、[16] アンコール=ワットの形がインド人技術者によるものであると結論してもよさそうである。アンコール=トムのバヨンはその形状を模倣したものであるが、ただカンボジア人技術者の手になっただけに人物像にアンコール=ワットとは異なる点が認められると考えられよう。

註

（1） アンコール=ワット Angkor Vat は「都城」を意味するサンスリット語ナガラ nagara の転訛形 angkor とタイ語・カンボジア語で「寺院」を意味する vat（ただし、発音はワット）との複合語。従って、「都城の寺院」を意味する。サンスクリット語・タイ語・カンボジア語、そしてフランス語にはW音がないので vat と書く。Angkor Wat は英語での綴である。

（2） Briggs, L.P.: The Ancient Khmer Empire, Ameri-

can Philosophical Society, 1951; CŒDÈS, G.: The Making of South East Asia. London 1966; MAJUMDAR, R.C.: Kambuja-deśa or Ancient Hindu Colony in Cambodia, Madras 1944.

(3) GROSLIER, B. Ph.: La cité hydraulique angkorienne, exploitation ou surexploitation du sol, BEFEO 66 (1979), Cartes 3—6 に Yaśodharapura を四次にわたって記述しているが、今の場合そこまで分割して考える必要はない。

(4) 藤岡通夫『アンコール・ワット』東京、昭45、一八三ページ。

(5) CŒDÈS, G.: Les bas-reliefs d'Angkor Vat, Bulletin de la Commission Archaeologique Indochinoise, 2. 170—220. (BRIGGS, op. cit. p. 204)

(6) PRZYLUSKI, J.: Pradakṣiṇa et prasavya en Indochine, Festschrift Moriz WINTERNITZ zum 70sten Geburtstag, Lejpzig 1933. 326—332.

(7) PRZYLUSKI, J.: Is Angkor-Wat a Temple or a Tomb? Journal of Indian Society of Oriental Art, 5 (1937) 131—144. (BRIGGS, op. cit. p. 204)

(8) CŒDÈS, J.: Les grands monuments d'Angkor, sont-ils des temples ou des tombeaux? Cahiers de EFEO 26 (1941) 29—31. (BRIGGS, op. cit. p. 204)

(9) BOSCH, F.D.K.: Le temple d'Angkor Wat, BEFEO 32 (1932) 7—21.

(10) FINOT, L.: Le temple d'Angkor Vat, Part 1. L'ar-chitecture du monument, Paris 1929, Introduction 5—36. (BRIGGS, op. cit. p. 204)

(11) CŒDÈS, G.: Angkor, an Introduction, Translated and edited by E.F.G ARDINER. Singapore 1963, pp. 34—38 [IV] Temples or Tombs.

(12) BOSCH, op. cit. p. 12.

(13) WALKER. B; Hindu World, sul Viṣṇu(Vol. 2,p.575); 『辻直四郎著作集』第三巻、二五二・二五三ページ。

(14) STUTLEY, M. and J.: Harper's Dictionary of Hinduism, New York 1977, sub. voc

(15) インド美術史においてヒンドゥー教のシカラ建築の起源は五世紀ごろの Bhitargaon にその祖型が見られるとされ、(s. WILLIAMS, J.G.: The Art of Gupta India, Princeton 1982, p. 85)、爾後ジグラ進行の発展にともなって、インド各地に巨大な建造物の出現したことが知られる。特に、南型はピラミッド形に何階にも積み重った多層の建築の形をなしている（上野照夫『インド美術史論考』東京 昭48、三四〇・三四一ページ）。

(16) 岩本『経典絵巻の源流を探れて』「日本絵巻物全集」25（昭54）、五八一七七ページ。

（いわもと ゆたか・創価大学特任教授）